

# ひとが動かす

## 最先端に挑む

4

有機酸を含んだ水溶液を取り出す素材の研究のなかに泥を入れて、放射線物質を抽出し、特殊な繊維に吸着させる。福島の原研時代だ。グラ

島県飯館村の土壌の除染実験が進む。手掛けるのは放射線技術の環境浄化研究所(群馬県高崎市)だ。「グラフト重合」と呼ばれる技術を使い、セシウムを効率的に吸着する新素材を開発した。須郷高信(69)は同社の社長を務める。

1999年、国の持つ特許を民間で生かすという政府の方針に沿う形で、原研の研究室長を兼職したまま、環境浄化研究所を設立した。ただ、思うよう

に事業化できず、借金だらけが膨らみ、眠れない日々が続いた。



環境浄化研究所社長 須郷 高信氏

### 《須郷高信氏のプロフィール》

1943年	群馬県群馬町(現高崎市)で生まれる
65年	日本原子力研究所(現・日本原子力研究開発機構)入所
86年	放射線を利用した長寿命化電池膜の実用化に成功
89年	高性能有害ガス吸着フィルターの実用化に成功
99年	環境浄化研究所を設立
2010年	日本放射線化学会技術賞
12年	文部科学相表彰

一言 「暮らして役立たなければ科学ではない。単なる学問にすぎない」

# 新素材次々、除染手助け

きつかけは知人に連れ、病院のシート、臭機能を持った衣料品を、カーテン向けに消臭機能を持った素材を開発。これが空気清浄機に消臭剤を

採用した。2011年3月、東京電力福島第1原発の事故

が発生すると、放射線の

## 接ぎ木技術に発想力プラス

除染に舵(かじ)を切る。水中からヨウ素、セシウム、ストロンチウムを効率的に吸着する新素材を、易しく説明するため、次々と開発。福島県内の企業経営者にもファンが多い。村岡食品工業社長根っからの研究者。「私が部下として把握できるのはせいぜい10人」。電場の効率化など専門外の分野でも科学的な視点で意見を言ってくれる。ファームドウ社長の岩井雅之も「あの発想力には頭が下がる」と話す。放射線の除染とともに、現在、力を入れているのが、加工廃材からレアアース(希土類)を効率的に回収できる素材の研究だ。「環境に加え、エネルギー、資源の分野にも力を入れたい」。古恭一教授の研究室に社員希を前に、穏やかな物言を派遣。「学生にピーカいの中にも、次を見据えては、トン単位の実験を体験させ

(敬称略)